

ジミ、シラウオ、シロウオの他にサクラエビ、ホタルイカなどもそうであるが、春は小さな命の集団を食べる機会が多いのかもしれない。「春」に限った食ではないがこんな歌もある。「なぜこんな大虐殺のじゃこを見てわしのこころは動かへんのか（吉岡太郎『世界樹の素描』）」

・独りよりふたりはよしと春玉葱のスープ
盛りつつ言にはいはず

尾崎左永子『青孔雀』

・独活や露むかしをおもふやうに食べ新玉葱のスープもつくる

三井ゆき『池にある石』

春（新）玉葱のスープを詠んだ二首。一首目、「言にはいはず」しかし「言」は温かいスープの中にたっぷり溶けているのだろう。二首目、「むかしをおもふ」ではなく「おもふやうに」という。心の流れは「むかし」から「新」へと移行する。

・内ふかく春の潮を含みたる大はまぐりを一口に食ふ
内藤明『斧と勾玉』

・瀬戸内に鱈の真子の季節きて口にぶちぶち愉しみて食う
玉井清弘『谿泉』

・たら、わらび、筍、独活とつづききて春の体はむくむくとせり

春の恵みを食べる喜びをストレートに伝

えてくれる三首。一首目、読者も「春の潮」をたっぷり含んだジュシーな大はまぐりを頬張った気分になる。二首目、香川県在住の作者ならではの春の味。煮付けの魚卵の歯ざわりが想像できる。三首目、「むくむくとせり」は冬の硬い土を持ち上げて生えて来た春ならではの味覚に力をもたらったのだろう。

・ノンアルコールも晩酌といへば晩酌で田螺の味噌煮ですお肴は
馬場あき子『あさげゆふげ』

・捨てなづな花咲き春のぐだぐだの心はもとな草餅を食ふ
とな草餅を食ふ

・アマリリス咲きて針魚さよりの句となる逝きて人なき椅子は残りて

歌集のタイトル通り多くの食べ物の歌がある。一首目、「田螺の味噌煮」という渋い酒の肴にノンアルコールビールという裏切りが、口語の言い回しとあいまって軽妙で楽しい。二首目、「春のぐだぐだ」も「心はもとな」も草餅がズンとお腹に入れば体幹が定まりそうである。三首目、平成二十九年十一月に急逝した夫であり歌人の岩田正への挽歌。アマリリスの赤と針魚の銀色の取り合わせが鮮やかで「逝きて人なき椅子」のさびしさが際立つ。帯文にもなっ

ている「あとがき」に次のような一節がある。「この歌集を編みながら、私がこの歌をかいていた時、岩田は階下のあの椅子に坐っていたのだなあ、と思うとまことにせつなく、ここ数年の夜々の感慨がまつわる。」季節の到来、節目を知らせてくれる句の食べ物、亡き人を思い出す最も身近なきっかけかもしれない。

「食の歌」ということで「食材」そのものというよりは、より「食卓」に近い歌を意識した。ここに挙げた歌の多くを最近出版された歌集から選んだが、昭和から現在にかけて生活スタイルは大きく変化しているにもかかわらず「食の歌」に時の隔たりは特に感じなかった。「句の味」は変わらないからだろうか。味覚と嗅覚は、視覚や聴覚よりも記憶に結びつきやすいと言われている。「食の歌」の喜びや寂しさや安らぎが直に伝わってくるのは共感しやすいからなのだろう。それだけに自分らしい切り口をどこに見つけるのかが大きな課題になってくる。しかし、味、香りとともに色彩を伝えてくれる「食」は魅力的な素材だと考えるのではないだろうか。